

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：21501
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23653320
 研究課題名（和文） 発達障害者のための対異性パーソナルスペース教育プログラムの開発

研究課題名（英文） Developing Guidance Program of Personal Space to Opposite Sex for the People with Developmental Disorder

研究代表者

佐竹 真次 (SATAKE SHINJI)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：90299800

研究成果の概要（和文）：女性に不快感を与えないための適切な「対異性パーソナルスペース」の認識は、相手である男性の年齢により大きく推移することが明らかになった。しかし、「対異性パーソナルスペース」について、自閉症スペクトラム障害者は定型発達者とは大きく異なる認識をしている場合があることも明らかになった。この研究で得られた定型発達者の一般データをもとに、発達障害者のための「対異性パーソナルスペース」教育プログラムを完成させる。

研究成果の概要（英文）：Young women's estimation of appropriate "personal space to men" to keep women from discomfort appeared to shift depending on ages of men who encounter women. On the other hand, some of men with autism spectrum disorder showed greatly different understanding of young women's estimation from what men with typical development did. Guidance program of "personal space to opposite sex for the people with developmental disorder" will be completed based on the general data which are collected from the typically developed.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |

研究分野：臨床発達心理学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：教育系心理学、発達障害、自閉症スペクトラム障害、パーソナルスペース

1. 研究開始当初の背景

近年、発達障害の中でも知的能力の高い自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：ASD）を持つ人において、社会に適應することが困難な事例と非行事例との関連性が注目されている。藤川ら（2004）によると、非行事例の中でも強制わいせつや強姦等の性非行が 43.8%と半数近くを占める。しかし、そのほとんどは悪意をもってなされたものではなく、同研究では自閉症スペクトラムの「対人接近型」としてその特異性が指摘されている。彼らは社会的認知機能が低いことで、人との距離感や人の表情等の非言語的情報から他者の心理を読み取り判断する

ことが困難であり、また自分の行動や言語が他者に与える影響を想像することが難しく、本来自然に学んでいくはずの社会的ルールが未学習のままとなる。

とくに重要な社会的ルールの一つである異性に不快感を与えないための「対異性パーソナルスペース」に関しては、ASD 児・者は自己認知が困難なために、思春期・青年期になっても自分の身体的形態や機能および期待される社会的役割・振舞いが年齢相応に変化していることに気づかず、幼児期に許容されていた異性への接近距離や接触行動をそのまま維持しようとする可能性がある。しかも、他者認知が困難なために、それがいつま

でも修正されないままになりやすいと考えられる。結果的に、異性への接近に失敗し、それが大きな苛立ちをもたらすことにより、いっそう「対異性パーソナルスペース」を逸脱するような行為に走ってしまうことも考えられる。

そこで、ASD 児・者に対して、児童期からそのような「対異性パーソナルスペース」について指導しておけば、思春期・青年期になると自分の身体的形態や機能および期待される社会的役割・振舞いが年齢相応に変化することに気づきやすくなり、自分の成長に応じて「対異性パーソナルスペース」を修正するようになると考えられる。

通常、他者との距離の保持や接触の節度等については、指導者の常識をもとに標的行動を考え、訓練計画を作り上げて指導することが常であり、必ずしも確かな根拠に基づくものとは限らないものであった。一方、知能の高い ASD 児・者の中には確かな根拠が視覚的に提示されると、スムーズに納得して社会的スキルの習得が促進される人も少なくないことを、臨床的に経験することが多い。

「対異性パーソナルスペース」の教育においては、異性への関心という最も強い動機の一つに関連することであるため、明確で統計的で視覚的な根拠を提示して対応することが、指導のしやすさと効果の高さの観点から優れていると考える。

2. 研究の目的

ASD 児・者に対して「対異性パーソナルスペース」について教育するために、その根拠となる一般データを多数の定型発達 (Typically Developing: TD) の若者から収集し、「対異性パーソナルスペース」の全体像を明らかにする。それをもとに「対異性パーソナルスペース」のイラスト入りガイドブックを作成する。また、指導前の ASD 者の認知がそのルールからどれだけ・どのように偏倚しているかを明らかにし、指導のための手順と留意点を得る。以上により「対異性パーソナルスペース」の教育プログラムを完成させ、ASD 者に対してプログラムの試行実験を行う。以上が本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 対象者

20歳前後の TD 女性 165名、TD 男性 104名、ASD 男性 4名

(2) 質問紙の作成

女性には主観的男性接近許容範囲について問う。男性には女性の主観的男性接近許容範囲についての推測を聞く。

質問紙内容の項目は次の5つとする。

①相手が近づいてきたときの許容距離 (0~10m 以上の尺度に丸を記入する。)

②相手に注視されたときの許容時間 (0~10 秒以上の尺度に丸を記入する。)

③話しかけられたときの許容できる相手の声の大きさ (10~110dB の尺度に丸を記入する。)

④接触されて不快に思わない身体部位 (14 に分けた身体部位の中から選択する。)

⑤見つめられても不快に思わない相手の表情 (7 種の表情絵から選択する。)

相手の男性の年齢を以下のように設定した。

①幼い男の子 (0~5 歳)

②小学生男児 (6~12 歳)

③中学生男子 (13~15 歳)

④高校生男子 (16~18 歳)

⑤成人男性 (19~39 歳)

⑥中年男性 (40~64 歳)

⑦熟年男性 (65 歳~)

相手の男性との親密度を以下のように設定した。

①知人：近所、学校、職場などの人

②非知人：見知らぬ人

(3) 質問紙の配布・回収

対象者である 20 歳前後の健常女性と健常男性については大学生等に協力してもらう。一方、アスペルガー障害・高機能自閉症をもつ男性については、親の会等を通じて協力を要請する。なお、本研究は山形県立保健医療大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 接近許容距離について

TD 女性側から見た場合の、相手の男性に対する接近許容距離は、年齢が低い方が近く、年代が上がるにつれて接近許容距離は伸びていき、中年男性に対して最も接近許容距離が遠いという結果となった。また、知人かそうでないかの違いは顕著であり、各年代で 2 倍以上もの差が見られた。全年代の平均値は、知人で 0.9m、非知人で 1.8m であった。TD 男性から女性の認識を推定した場合の接近許容距離は、TD 女性から見た場合のそれとほぼ一致しているが、TD 男性の方がより長い距離を設定する傾向がみられた (図 1, 2)。

一方、ASD 者では個人差がきわめて大きいことが示された。A は全般的に距離が短過ぎた。B は 1~2m を単純に選択し続けた。C は 0.5m~8m の範囲で大きく変動した。D は幼児から熟年に至るまで距離が少しずつ長くなっており、TD 者の傾向に近い状態であった (図 3)。

TD 者では接近許容距離において、必ずしも情報を交換していないはずの男女間で一致がみられることから、男女ともに適切距離を直感的な方法で調整していることが推測される。

ASD 者では、TD 者の結果とは大きな違いが

みられたが、それが対人距離認知の偏りによるものなのか、またそれが現実的な対人的行動に反映されているのかについては今後検討していく必要がある。

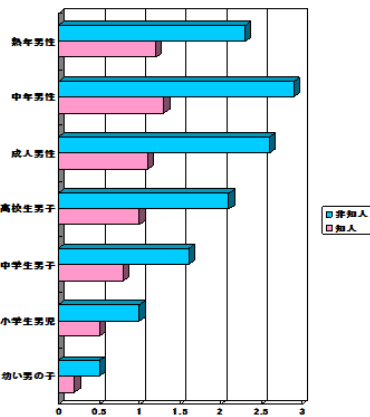


図1 定型発達女性の立場から見た相手の年代別に表した女性にとっての接近許容距離

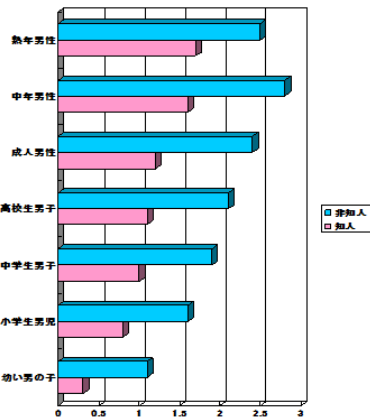


図2 定型発達男性の立場から見た相手の年代別に表した女性にとっての接近許容距離

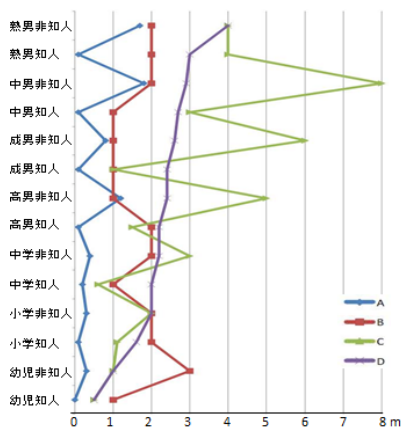


図3 ASD男性の立場から見た相手の年代別に表した女性にとっての接近許容距離

(2) 許容注視時間について

相手の年代別に表した許容注視時間は、距離とは逆に、年代が上がるにつれて短くなるという結果となった。全年代の平均は、知人で5秒、非知人では3秒であった。またそれは女性と男性とで一致していた(図4)。許容注視時間においても、必ずしも情報を交換していないはずの男女間で一致がみられることから、男女ともに適切時間を直感的な方法で調整していることが推測される。

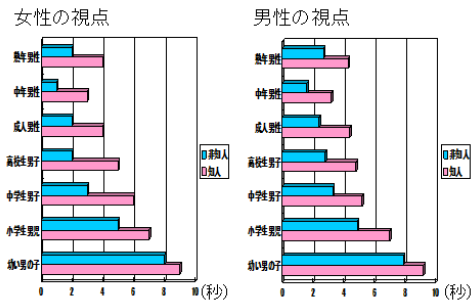


図4 相手の年代別に表した許容注視時間

(3) 許容できる声の大きさについて

相手の年代等にかかわらず、許容できる声の大きさは50~60dBでほぼ同程度であった。許容できる声の大きさも女性と男性で一致していた。

(4) 許容身体接触部位について

接触が許容できる部位に関して、知人より非知人の方で厳しく、体幹に近いほど接触が許容されず、一方、肩、手など上肢への許容率は比較的高かった。年代別に見ると、幼い男の子に対しては複数の部位で比較的許容できるとされるが、中学生男子以上では許容部位が急激に少なくなり、中年男性で許容部位が最少になることが示された(図5, 6, 7)。その傾向は、男性の全年代に渡り女性と男性の視点間でほぼ一致しているが、男性の方が幼い男の子についてより甘く設定する傾向がみられ、20歳前後の女性の敏感性を推測し切れていないことも考えられる。

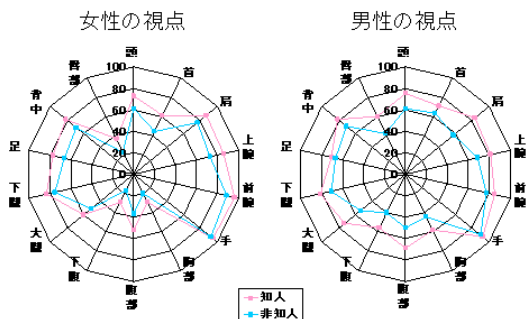


図5 幼い男の子からの女性の身体部位別接触許容率

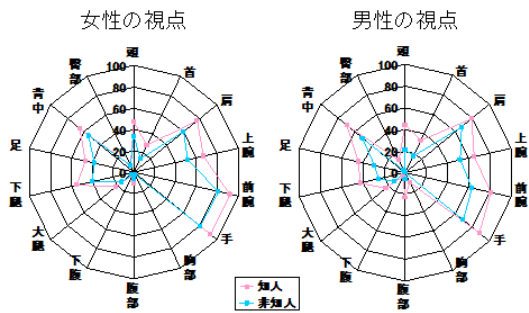


図6 小学生男子からの女性の身体部位別接触許容率

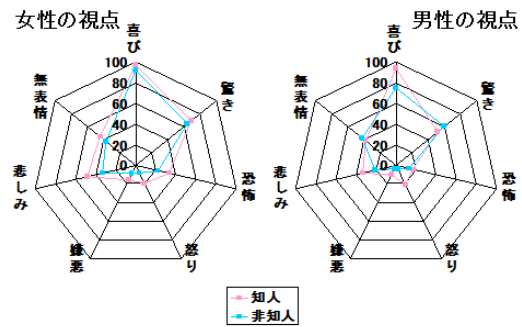


図9 小学生男子から女性が見つめられる際の各表情許容率

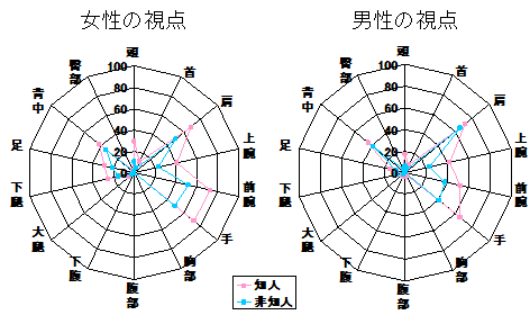


図7 中学生男子からの女性の身体部位別接触許容率

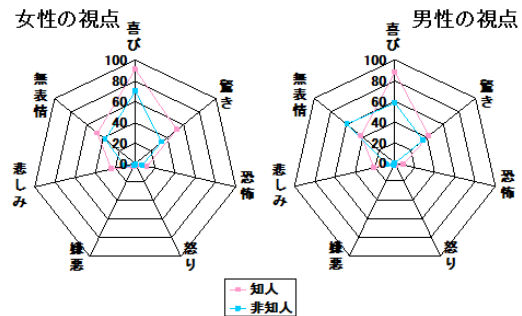


図10 成人男性から女性が見つめられる際の各表情許容率

(5) 見つめられても許容できる表情について

女性が男性から見つめられても許容できる表情に関して、幼い男の子や小学生男子では、許容率が「喜び」で最も高く、「驚き」、「悲しみ」、「無表情」が次に続いた。また小学生男子では、「怒り」、「嫌悪」が極めて低かった。成人男性では「喜び」で最も高く、「驚き」または「無表情」が次に続き、「怒り」、「嫌悪」、「悲しみ」は極めて低かった。成人男性では、「喜び」でも知人より非知人の方が低くなる傾向があった。その傾向は、女性と男性の視点でほぼ一致しているが、男性の方がより低く評価する傾向がみられた(図 8, 9, 10)。男性の年齢が高くなるとネガティブ表情の許容率が極端に低くなることには、意図をもつ大人の男性に対する女性の一般的警戒感が大きく影響していると考えられる。

(6) まとめ

本研究の結果、TD 者の「対異性パーソナルスペース」は男性の年齢により大きく異なる部分が多いことが明らかになった。また、接近許容距離に限っても、ASD 者はTD 者とは大きく異なる認識をしている場合があることも明らかになった。この成果は国内外において新しい知見である。今後は ASD 者における調査と分析を進めるとともに、これまで得られた一般データをもとに、「対異性パーソナルスペース」のイラスト入りガイドブックを作成し、それを活用した教育プログラムを完成させた上で、ASD 者に対してプログラムを試行しその効果の検証を行う。

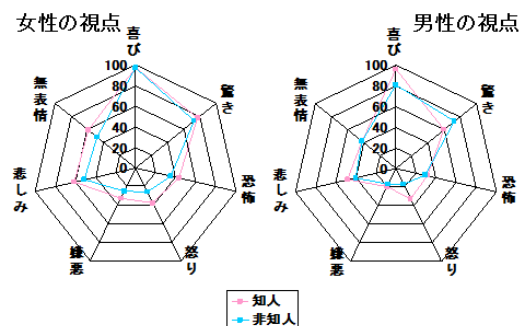


図8 幼い男の子から女性が見つめられる際の各表情許容率

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

①佐竹真次：男性は女性にどこまで接近してよいか：ASD 青年の回答．日本発達心理学会第 24 回大会，2013 年 3 月 15 日，明治学院大学。

②佐竹真次：若い女性が男性に見つめられても許せる表情．日本発達心理学会第 23 回大会，2012 年 3 月 10 日，名古屋国際会議場。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐竹 真次 (SATAKE SHINJI)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：90299800